

氏 名	とき おか はる み 時 岡 晴 美
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	論 工 博 第 3197 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	中小自営業集積地域の居住・営業の将来像に関する研究 —家業と家族のライフスタイルの変容分析から—

論文調査委員 (主 査) 教 授 三 村 浩 史 教 授 加 藤 邦 男 教 授 高 橋 康 夫

論 文 内 容 の 要 旨

伝統的な都市には、小規模で家族経営型の事業所が集積する職住共存地域が幅広く存在した。しかし、産業・流通構造の近代化は、この種の小規模自営層を減少させる。家族的就業も減少して被雇用者へと移行する。これが近代化論の通説であるが、本論文は、このような都市論に疑問をさしはさんで、現実には、自己変革しながら現代に再生している中小規模自営層とそれらの事業所が集積する地域を研究対象としている。

論文は、序論Ⅰ～Ⅲ部、結論の全8章で構成されている。

序論・第1章は、この研究の特徴である生活者としての家族のライフスタイル論を検討している。既往の諸研究、近年の社会調査のレビューを行い、その上で、現代家族を分析する観点と方法を設定している。

第Ⅰ部は、地域を形成する主体としての中小自営業事業所とその経営の歴史的変遷を分析している。すなわち、第2章では、伝統的な生活システムとして営まれてきた家業と家族のライフスタイルが、近代化を受容しながら、現代でなお生きつづける家業の意味を問うている。

第3章では、中小自営業事業所が単独ではなく多くは集積立地していること、また職住共存のコミュニティに依存してきたことを述べ、交通・流通条件の変化や職住分離という近代化のもとで、なお集積を持続する意味を問い、全体として研究の現代的課題を明確化している。

第Ⅱ部は、いくつかの特色ある同業種が集積する地域を対象として行ったところの、自営業の家業・家族のライフスタイル及びコミュニティ形成力に着目した事例調査の報告である。この動向分析は将来像を推論する基礎資料となるものである。すなわち、第4章では、伝統的地場産業の典型的事例として、備前焼の窯元世帯を取り上げている。調査から、窯業生産者が次第に作家志向を強め、産地イメージを向上させていること、展示販売さらにツーリズムの受け入れを進める中で、妻の役割分担が大きくなっていること、同業集団は、家業の後継ぎという形態よりも作家の新規参入で補充される傾向があること、工房と展示ウインドーのある町並みが地域の活気を表現していることを、明らかにしている。

第5章では、伝統的な中小旅館集積地域の事例として城崎温泉旅館地区を調査している。この地域は泉

源財産区を基調に家業型経営の旅館群によって経営されている。業務形態として女将としての妻の役割責任は大きく、職住分離も容易ではない。しかし、次世代に継ぐために新しい業務管理とライフスタイルが模索されている。また、大谷川兩岸の3階建ての町並みは、共同外湯とともに地域のイメージを表現するものとしての意識が高まり、保存修景が図られている点を評価している。

第6章は、伝統的な商業地域の例として金刀比羅宮門前町を調査している。時代を超えた参詣対象であるが、階段道沿いの門前町は、来訪者の滞在行動の変化、観光バス・自家用車アクセスの増加、経営者の高齢化と後継者の不在等の状況変化に対応できていない。将来像のシナリオとして、さしあたり既存の恵まれた場所性に依存する経営を持続しながら、新しい参詣・来訪スタイルの創出と魅力的な町並み再生とを一体化する地域演出をめざしている点に着目している。

第Ⅲ部・第7章は、複合業種が多様に混在する歴史都市の都心部における老舗家業型事業所を対象にしている。京都府のデータから、百年以上経営が継承されており、かつ都心4区内に立地している事業所を選定して、経営、居住、建築物とそれが立地する町並みについて調査している。その結果、家業は持続しても業種は変化すること、その将来像は家族経営から企業経営まで、およそ7つの経営パターンの移行として推測できることを明らかにしている。また、歴史的都心部における老舗事業所の町家型店舗については、経営状況の変動があっても、家業の表徴として維持される傾向が強く、これが歴史的都心部に存在感を与えていることの意義を見出している。

結論・第8章は、時代の状況の中で、経営と家族及び居住のライフスタイルを創出しつつ自己変革し持続する小規模自営業集団とその集積地域の将来の可能性を展望して結びとしている。

論文審査の結果の要旨

この論文は、都市・産業の近代化主義のもとで見過ごされてきた、中小規模自営業の事業所が集積する地域の活性化をテーマにした研究である。得られた主な知見は次の通り要約できる。

1. 中小規模自営業集団が、現代において自己変革しつつ、特色ある産業と職住共存のコミュニティを持続していることに注目して、これを地域計画に位置付け、将来目標像を設定する現代的発想を提起した。
2. これまでの外挿的な将来予測ではなく、自営業を営む業務の内容、家族の就業と生活、ジェンダーとしての妻の役割、後継者の有無、家業観など、生活システムの内面に立ち入った調査に基づく、ライフスタイルの構造的理解と将来展望の方法論を開拓した。
3. これら自営業では、外部にむけては、単なる製造や販売の拡大ではなく、作家アトリエ・ギャラリー化や旅館・老舗店舗などの個性化といった文化的付加価値の増大による現代的再生をはかっていること、内部では、家族の主体的な役割の再分担や職住関係を含めた居住条件の向上を図ることで、生活システムの改革を志向していることを明らかにした。

4. 個別事業所では造成できない地域イメージの演出やツーリズムの導入が意識され、そこで地域の特性を表徴する町家型建築と町並み魅力の形成が地域振興の手立てとしても期待されていることを見出した。

以上のように、本論文は、近代化主義の都市政策を批判して、多彩な特徴をもった中小自営業集団がつくる個性ある地域の将来像について実証的考察を進めたもので、学術上、実際上寄与するところが少なく

ない。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成9年1月23日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。